

「知らない人に癒されて」

牛田匡牧師

聖書 ヨハネによる福音書 5章 1-18節

今回の聖書のお話は、イエス様が体の麻痺した人を癒されたというお話でした。イエス様があちこちで多くの病人たちを癒された、という記事は、4つの福音書にそれぞれ記されていますが、今回のベトザタの池でのお話は、『ヨハネによる福音書』のみに記されています。この「ベトザタ」という地名は、以前の口語訳聖書では「ベテスタ」と訳されていて、そのように読むと「恵みの家」という縁起の良い意味になります。私たちの知っている所で言うと、先日も釜ヶ崎のいこい食堂支援の一環として、玉ねぎの苗つけのお手伝いに寄せて頂いた大浦農園のお家の名前が「ベテスタの家」で、それは聖書のこの箇所から付けられた名前です。沢山の人が集い、出会い、共に働く恵みの家……。良い名前です。とはいえ、歴史学的、考古学的には、エルサレムの近くにあったと言われるこのベトザタという場所がどこなのかは、定かではないとのこと。

4 節にある説明書きを読むと、「彼ら（病気の人、目の見えない人、足の不自由な人、体の麻痺した人たち）は、水が動くのを待っていた。ある時間になると、主の天使が池に降りて来て水を動かしたので、水が動いたとき、真っ先に入る者は、どんな病気にかかっているか、良くなったからである」という不思議なことが書かれています。この記述から、このベトザタの池というのは、温泉地、しかも間をおいて地面から蒸気や温泉が噴き出す間欠泉だったのではないかと考えられているようです。確かに、そのように考えてみますと、「何で、急に地面からお湯が噴き出すのか、これは天使の仕業なのではないか」と古代の人々が考えたかもしれない、というのは、納得できることではないでしょうか。温泉がたくさんある日本では今でも、「湯治」という言葉があったり、温泉ごとに「この温泉は〇〇に効きます」という薬効が謳われていたりするわけですが、それと似ています。

そのようにして、このベトザタの池の周りには、多くの病人やケガ人が集まって来ていたようです。またそこには「5つの回廊」があったということです。「回廊」というと何だか大きな建物を想像してしまいがちですが、実際には柱があって屋根があって、というような、いわゆる小屋のようなものだったのではないかと思います。そしてそこには大勢の人たちが横たわっていましたが、その中でもイエス様の目に留

まったのは、実に「38年も病気で苦しんでいる人」でした。2000年前のパレスチナ地方では、庶民の平均寿命は40歳前後だっただろうと考えられているようですが、「38年間も病気で苦しんでいた」ということは、この人はその生涯のほとんどを病気で苦しんで来ていたということになります。

当時、病気と罪とを結びつけて考えるのは、常識だったようで、「いかなる苦しみも、罪が無ければ存在しない」というユダヤ教の教師の言葉もありましたし、『ヨハネによる福音書』9章にも、「先生、この人が生まれつき目が見えないのは、誰が罪を犯したからですか。本人ですか。それとも両親ですか」(9:5)と弟子たちがイエス様に質問している言葉が記されています。ですから、このベトザタの池のほとりにいた身体の麻痺した人は、身体が動かないという自身の境遇を嘆いただけではなく、自分自身の罪を責めたり、また両親や家族の罪を責めたりしていたのではないかと思います。イエス様のこのお話から、時も場所も大きく異なる現代の日本ですら、「あなたが不幸なのは、先祖の因縁だ」とか、「〇〇の崇^{たた}りて、あなたの家族は不幸になる」とか、様々な言いがかりをつけて、人を不安にさせて、その不安を解消させるために高額な商品を購入させたり、多額の献金をさせたりするカルト宗教がありますから、当時の人々の絶望というものは、さぞかし深かっただろうと想像します。

自分で歩いて来たのか、誰かに運んで来てもらったのかは、分かりませんが、その人は何とか一縷^{いちる}の望みをかけてこのベトザタの池までやって来ました。そして水が動く「その時」を待ち続けたわけですが、「その時」にはいつも他の人が先に降りて行ってしまい、癒されるのは自分ではありませんでした。恐らく何年間も、そのベトザタの池のほとりにいたのでしょうから、その間に多くの人がやって来てはまた出て行き、いつの間にか彼は古参になっていたのではないかと思います。いつも「その時」には他の人が癒されるのを眺め、そしてまた癒されて行った人たちの喚起の声を耳にしては、羨ましく思い、「次こそは自分が」という思いが、いつの間にか、他人のことを妬ましく思い、「何で自分は、報われないのか」と、周りの人たちに対する恨み辛みもかさんでいっていたのではないのでしょうか。

多くの病人たちが集まって来ていた中で、世間から「罪人」と見なされ、弱さや傷を自覚した人たちだからこそ、お互いにそれらを認め合い、優しくいたわり合えれば素敵だと思いますが、恐らく現実はそうではなかったということが、ここから読

み取れるのではないのでしょうか。「どうして自分ばかりが、こんなにもつらい目に遭わなければならないのか……」。38 年間、病に苦しんでいた人の苦しみは、身体の麻痺という身体的なことだけではなく、心の内面、魂の奥底からの苦しみでもありました。……そのような人に対して、イエス様はイエス様ご自身の方から目を留め、語りかけられました。6 節です「(あなたは)良くなりたいか」……。これは質問形ですが、「元気になりたいね」というような、呼びかけ、確認の言葉として、響いたのだらうと思います。

故郷の人々たちからははるか昔に見放され、何とかベトザタの池まで来たが、ここでも周りの人たちから相手にされず、手を貸してもらえず、ただ時間ばかりが過ぎていき、いつの間にか何年間もの長い時間が経ってしまった……。 「諦めてしまったら終わり」ということは分かっている。だから決して絶望はしていないけれども、それでももうダメかもしれない、諦めてしまおうか……。 そのように小屋の隅の方で腐ってしまっていた彼に、イエス様は声をかけられました。そして、言われました。「起きて、床を担いで歩きなさい」(8)。この「起きなさい」という言葉は、「復活」を表現する時にも用いられている言葉(エゲイロー)でもあり、「起きる」「目を覚ます」という意味の言葉です。「横になっている所から起き上がる」「眠っている所から目覚める」「死んでいる所から再び立ち上がる」ということです。ですから、彼は「死んでいたのに生き返った」「腐っていたのに生き活きとし始めた」ということだったのでしょう。

「あなたは立ち上がることができる。生きることが許されている。自分や他人を責め過ぎないで、諦めてしまわないで、腐ってしまわないで、あなたは起き上がって、自分で歩いて行くことができる……」。それがイエス様の伝えたメッセージだったのでないのでしょうか。そして、その人は自分を癒してくれた人が誰かということを知らないまま、自分の足で歩き出し、自分で横になっていた^{とこ}床、ゴザやムシロのようなマットレスを丸めて担いで、歩いて行きました。

翌日、エルサレムの神殿で、彼がイエス様と再会した時、イエス様は「あなたは良くなったのだ。もう罪を犯してはいけない。さもないと、もっと悪いことが起こるかもしれない」(14)と言われたとありますが、これは 9 章 3 節にあるように「病気や障がいは、本人や家族の罪とは一切関係がない」というイエス様の基本姿勢とは矛盾していそうな発言です。しかし、あえて言えば、その病気や障がいの中で、

「それらを、さらに自分自身や周りの人たちのせいにして、責め続けてはならない、必要以上に卑下し続けてはならない」ということではないかとも思います。9章3節ではイエス様は「障がいは誰の罪のせいでもなく『神の業がこの人に現わされることになるでしょう』」とだけ言われています。人々が共感共苦をもって共に生きようとする時、そこに今のなおいきて働いておられる神様の働きが実感されるだろう。その時こそ、全ての人、全ての命が神と共にあって、生き活きと生きられる、復活の命を生きられるのだ、ということなのだろうと思います。

ベトザタの池のほとりでの、イエス様との出会いによって癒されたこの人は、イエス様に対して何か良いことをした見返りに、その報酬として癒されたわけでもなく、そもそもイエス様が誰なのか、その名前も何も知らないままで、癒されました。一方で私たちは普段の生活の中で、周りの人たちをその肩書や能力で差別化して、判断することが多くあります。そして、そのようにしている限り、私たち自身もまた「あなたがたは、自分の裁く裁きで裁かれ、自分の量る秤で量られる」(マタイ7:2)という聖書の言葉の通りに、同じように判断されることでしょう。「知らない人に癒される」……。私たちも実は日々の生活の中で、知らないうちに、知らない相手から、たくさんものを頂いている、ということはないでしょうか。相手の肩書とか能力とか、お金の支払ないとか、それらの有無に関係なく、交わされる挨拶であったり、笑顔であったり、何気ない言葉であったり……。実はそれらの数々が、私たちの心に火をともし、眠っていたのに目覚めさせ、死んでいたのに立ち上がらせ、倒れ伏していたのに癒す、ということが確かにあるのではないのでしょうか。

早くも能登半島地震から1カ月が経ちました。極寒の中、避難生活を続けられている方々も多くおられます。多くの団体や個人が、被災地への支援活動に現地入りをされています。また避難生活を送っておられる方の中にも、一方的に支援され続けるのではなく、それぞれの方が「自分に出来ることを」と言って、互いに持てる力を出し合っておられるとのこと。私たちは受け続ける一方でも疲れてしまいますし、与え続ける一方でも枯渇してしまいます。互いに与え合い、担い合い、支え合うことを通して、私たちは互いに癒され合い、生かされて合って行くということを心に留めて、私たちは今週もここから送り出されて行きます。